

## 総合俳句論

### 第六章 俳句のことば ―その多様性―

#### 1 口語俳句

昭和俳壇に彗星のごとく現われた篠原梵は、昭和50年秋、松山に帰省中急逝した。愛媛新聞に載った親友八木絵馬氏の追悼文は、梵俳句をこう評している。

鋭い感覚、あふれるばかりの抒情性をきびしく制御して生ずる迫力、しかもそれを表現するのに、定型を基調としながら、独自のデフォルメを加えて、近代的で斬新なリズムを編み出した。

篠原梵は、死の前年の昭和49年秋、全句集として『年々去来の花』を刊行している。この句集には、第一句集『皿』（昭和16年刊）の340句と第二句集『雨』（昭和28年刊）の391句に、その後の144句と更に昭和17年の中北支の旅で得た44句も加え、計919句が収録されている。なお遺稿集『葉桜』に採録された『年々去来の花』以後の41句があるので、これらの960句が篠原梵の俳句のすべてである。このなかで私が日頃愛唱しているのは、次の句である。

水筒に清水しづかに入りのぼる

梵作品には、日常生活をうたいあげたものが多く、特別なところから取材してはいない。この句も、身近なものを、鋭く深く観察し、曖昧なものを除去している。作者の精神がよく集中されており、言葉が確かなのである。座五の「入りのぼる」といったところに特に作者の工夫があり、作者の感動が強く表出されている。この句は、確かに十七字でまとめあげてはいるが、従来の五七五定型とは違って、座五が「入り」と「のぼる」の二音と三音に切れており、切れ字の「かな」に匹敵する効果をあげている。意味の上では、「水筒に清水しづかに入り」と「水筒に清水しづかにのぼる」と二つに切れ、水筒の底に溜っていく水と、それへ落ちていく水とが出会って鳴っているのを、読者は生きいきと聞くことができるであろう。

篠原梵は、明治43年生まれ。松山の小学・中学・高校を卒業し、昭和6年東

大國文科に人学する。松山高校俳句会では、川本臥風先生の指導を受け、上京後は、臼田亜浪に師事する。亜浪の「石楠」は、楠本憲吉氏によると、中間派として位置づけられている。「ホトトギス」派と碧梧桐、井泉水らの一派との中間に位置するといっているのである。第一句集『皿』は、昭和16年9月の発行なので、収録された340句は、ほぼ十年間にわたる作句活動のなかから選ばれたものである。この十年間の梵は、松高から東大へ進み、卒業後は、中央公論の編集部員となりジャーナリズムの世界にいた。彼の天賦の才能が俳壇で輝くのは、大学を卒業した昭和9年頃からで、昭和14年改造社の「俳句研究」の座談会に、草田男、楸邨、波郷の三人と出席したときが頂点となる。司会は、山本健吉であった。

この時代に、いわゆる梵調という近代的で斬新なリズムを編み出したのである。俳句の十七音を柔軟に活用し、独自の破調を生み出したのである。主として座五に彼の工夫がこらされている。五七六、五七七となることが多い。

宵寒の背中を吾子のつたひあるく  
水底にあるわが影に潜りちかづく

一句の最後に至るまで気を抜いていない。座五に強い感動がこめられているので、五七五が五七六、あるいは五七七となるのである。しかし梵の破調は、定型に反発し、意識的に定型を崩しているわけではない。やむを得ず破調となったのである。近代的な感覚や内容を表現するために、新しい言葉が必要となったのである。近代俳句は、東大出身のインテリが指導してきた知的な俳句である。その意味では梵俳句も、決して傍流ではなく、近代俳句の本流といえる。

扇風機止り醜き機械となれり  
葉桜の中の無数の空さわぐ

いずれも知的で、新鮮な感覚の句である。扇風機の動と静の対比、葉桜と空の対比が鮮明で、作者の眼が確かである。冷徹とさえいえるのである。それでいて、作者の強く確かな感動が読者の心にじかに伝わってくるのである。

冬日蹴るくびれのふかき勁き足  
吾子立てり夕顔ひらくときのごと揺れ

梵は、草田男、楸邨、波郷と並んで、人間探求派といわれたが、そういった人間臭さが、吾子俳句という形で現われ、世の注目を浴びた。

第二句集『雨』は、昭和16年から昭和24年末までの391句を収録している。この8年間に、中央公論を止め、郷里の愛媛青年師範教授となり、また元の中央公論に戻っている。この句集では、難解であった句が平明となるが、一層深みを増している。私自身が愛唱する梵俳句の多くは、この時代のものである。

稲の青しづかに穂より去りつつあり

蚊が一つまっすぐに耳へ来つつあり

水筒に清水しづかに入りのぼる

鯉幟黒き片目をして廻る

誰か咳きわがゆく闇の奥をゆく

枯草の一人の幅の径下る

『雨』以後の作品は、「中空」と題して全句集『年々去来の花』のなかの最後を飾っている。この時代には私の愛唱する句が少ない。

シャボン玉につつまれてわが息の浮く

火にくべる残菊花びらから燃える

「中空」時代の梵は、たしかに作句活動が停滞しているが、私たち後進に大きな問題提起をしてくれた。人間として最も大切なことを考えさせてくれるのである。長らく作句を怠っていたのは、第一に生活の多忙さからである。中央公論編集長、出版部長等の激職を歴任している。芸術という隠れ蓑の中で怠惰な生活を送っていたのではない。社会人としての職業をおろそかにしない立派な人生を送っていたのである。

もう一つの問題提起は、口語俳句の試みである。

北極星またたく私はまたたかぬ

この点について梵自身が語っている文章があるので、句集『年々去来の花』別冊の『径路』のなかから次の文を、すこし長くなるが引用してみよう。

俳壇人といふのも、文章を書くときはかなり普通のことばで書くのに、俳句作品となると時代ばなれ、あるひは日常ばなれをする。お互に変だとも気づかず、または思はず、さうしてあやしまない。俳句結社が反社会的集団ではないのに、歳月が経てば経つほど、世間ばなれをしてゆく文語体で物事をあらはそうとするこの創作活動をどう考へてゐるのであらうか。これはをかしいのでは

ないかと疑ってみたりしないのだろうか。日常普段のことばであらはずのな  
いと、把握することのできない、言ひあらはずことのできない何物かを逃がす  
ことになるのではなからうか。新しい感覚や角度が見えて来ないのではないか。  
このようなことを寄贈された俳誌を見てみて考へることがある。そこで、自分  
自身はどうなのか問題になる。

平常のことばで作らないといけない。口語体でつくるのがほんたうである。  
八木と山あるきをはじめ、ときどきにつくる俳句はさうしようとしてとめて来  
た。「中空」に収めた句のうちの半分くらゐはみなそれを心がけてつくったも  
のである。……いつの時代でも、先輩は後輩の前に立って、次ぎの時代への橋  
渡しの役目をするのが建前である。さういふ気持で「中空」のなかの半分の口  
語表現の句を残さう、それらが自分自身でできた精一杯のところであると思ふ。  
これ以上はもう自分にはできない限度である。

「生活と俳句」「文語と口語」という難しい問題をもう少し明らかにするため  
に、梵を、波郷と比較してみよう。

バスを待ち大路の春をうたがはず 波郷

雁やのこるものみな美しき

霜の墓抱き起されしとき見たり

扇風機止り醜き機械となれり 梵

葉桜の中の無数の空さわぐ

水筒に清水しづかに入りのぼる

これらは、二人の代表句といわれ、私も好きな句である。波郷の句には、たし  
かに人間臭さや境涯的なものがあるが、日常的な社会生活の匂いがとぼしい。  
「雁」、「霜の墓」「バスを待ち」といったところには、現実の社会で動いている  
という生活感情がない。さらに形式の面から見ると、波郷の句は、文語定型を崩  
すことがほとんどない。その可能性の限りをつくって詠いつづけている。切れ  
字の働きも確かである。波郷には、俳句が自分で終ってしまうならそれで良い  
という決意がある。妥協によって俳句の延命を願っていたりはしない。詩は、  
結局 自分一人のものであるという潔さがある。

波郷と比べると、梵の「扇風機」、「葉桜」、「水筒」は、生活感情が豊かで、  
作者の活動的な生活を充分に知ることができる。もちろん私は、どちらの行き  
方が良いのか、などということの問題にしているのではない。波郷、梵それぞれ  
自分に与えられた人生を歩んだにすぎないと思っている。梵の句には、独自の

デフォルメがある。日常身近なものを詠うことによつて、また新しい感覚や内容を詠うために、梵調といわれる新しいリズムが生まれなければならなかったのである。梵の現実を見る眼は、きびしく確かである。そこから生まれた近代的リズムなのである。従つてその行きつくところは、当然口語俳句ということになる。新しい現代的内容には、当然口語がふさわしいであらう。もちろん現実には、昔からの変わらぬものがあるので文語俳句を否定することはできない。梵の作句態度は、未知の世界へ一人で向かつていく勇敢な精神に支えられている。波郷も梵も、まるで方向が違つているが、一人でひたすら俳句に立ち向かつているという点では、違いは全くない。どちらが良いというものではない。俳句作家はみなどちらかの道を歩んでいる。自分に与えられた道を歩んでいるにすぎない。別れ道にさしかかったならば、どちらかを選択するのである。選択の決意は簡単で、好きな道を選べばよい。どちらを選択しても結局同じで、ひたすら一人で俳句の道を歩きつづけなければならぬのである。梵の俳句は、未来へ向けての一方の明るい道をさし示してくれる。私たちは、梵の俳句を、あるいは波郷の俳句を超えて、未来の俳句へ向かつて進んでいかねばならないであらう。

## 2 ひらがな俳句

日本人本来の大和言葉には、ひらがながもつとも相応しいのではないか。ひらがな俳句は、俳句のこれからの多様な展開の中の重要な位置を占めるのではないか。以下は、高橋信之作のひらがな俳句六句である。

さくらさくらさくらさくらてのひらに  
はだかのきんぎんのすなくつついて  
うきぶくろたのしいろにふくらます  
たなばたささほしにとどけとたくきる  
とうさんとおなじひやけのてをつなぐ  
かあさんがきつたすいかのいいにおい

※作業中

## 3 ドイツ語の俳句

私の文学研究の方法は、文学と語学、あるいはドイツ文学と日本文学といった截然と区分した上でのドイツ文学研究の方法ではなく、ときには比較文学的研究の方法を取り入れることもあれば、インターネットを通して文学を見るこ

ともある。これは、できるだけ広い視野で文学を読み、研究したいという、ただそれだけの、文学を見る一つの見方にほかならない。

日本におけるドイツ語とドイツ文化の情報収集のために、インターネットの果たす役割は大きくなったと言って良いであろう。「ドイツ語で書かれた俳句」を文学作品の一例として取り上げ、ドイツの俳句の傾向を知るには、それが掲載されているホームページの一つであるドイツ俳句協会のホームページ③を、まずは訪ねることである。そこに書き込まれているドイツ語俳句の例として、

Die Spatzen hupfen  
auf der Mittagsglut um den  
eigenen Schatten /Magdalena Obergefl

雀跳ねるきらきら自分の影を (高橋信之訳)  
を挙げよう。

Nacht str . t . erall  
in den reifenden Kirschen  
steht eine Leiter. /Mario Fitterer

夜の梯子立てかけられ桜桃の熟れ (高橋信之訳)

フライブルクのマリオ・フィテラーは、名の知られたドイツ語俳句作家で、習熟した句を世に出している。

Auf dem wei . en Blatt  
- verschmiert - der Motte Leben  
ein Silberstreifen /Margaret Buerschaper

白い紙に散らされ蛾の命は銀の筋 (高橋信之訳)

この句は、一九九〇年のフランクフルト日独俳句大会 (Haiku-Treffen) ④で推賞されたもので、作者がドイツ俳句協会会長なので、ドイツ語の俳句の一つの水準を示しているものと判断して差し支えない。俳句形式としての *5-7-5* 音節三行をうまく纏めている句である。季語・季題は、ドイツに歳時記がないこともあって、俳句実作や作品解釈では主要な課題になっていない。それに代わるものとして自然の事物や風景との関わり方に高い関心を示している。ブアシアーパーの句の *Motte* は、蛾という意味だが、季語・季題としての働きをして

いるわけではなく、「蛾」という自然と作者との関わり方にこの句の主題がある。

日本語の俳句では、5・7・5の十七字音と季語が俳句の約束事となっているが、ドイツ語や英語の俳句では、ひどく曖昧で、「短い」と「自然」と関わりのあることが俳句の説明として一般的である。

In ein Buch bin ich vertieft,  
von den Augen schwebt mir der dichte  
Nebel meines Heimatlandes. / Karlheinz Walzock

書に耽り故国の霧の濃さ浮かぶ

この句は、俳誌「いたどり」に発表されたものであるが、選者の川本臥風は、次のような評を述べる。

ワルツオックさんには余り接触もせず、句の方の事も知らなかったのですが、度の投句にはびっくりしてしまいました。この人は、愛大の独逸語の先生なのですが、こんなにも日本語に、とりわけむつかしい俳句に入って行った事は実に驚嘆すべき事です。

Ins goldne Kornfeld  
fri<sup>o</sup> t sich die M<sup>o</sup>aschine  
Streifen um Streifen. / Annelore Stamm

熟れ麦の刈り機の食める筋また筋 (高橋信之訳)

この句の良さは、何といっても、季節感あふれる風景が鮮明に生き生きと表現されているところにある。この句の構成、その言語の構造について私なりに少しの説明を与えると、句の冒頭に置かれた前置詞と冠詞が融合した「Ins」は、風景の位置、その空間をまず明確に設定し、揺るぎのないものにした。方向を表す四格の冠詞「s」は、この風景にうまく「動き」を入れている。第一行の母音「o」と第二行、第三行の子音「s」との音の対比も実に効果的で、ハイクの中の風景を鮮明にしている。第一行の母音「o」は、明るく広々とした、それでいて落ち着きのある風景を表現し、そこへ刈り取り機が第二行の子音「s」でもって切り込んでくる。第二行と第三行との間の切れも、ハイクの、その切れでもって、「筋また筋」といった取り入れの風景をうまく浮か上がらせ、一句が収まっている。完成度の高いドイツ語の俳句がドイツの風景の中から生まれた。

俳句文学の歴史的発展の中で、今、俳句が日本語だけに留まらずに、多様な外国語で書かれるということ、また、海外の様々な地域で日本語の俳句が作られるということは、俳句の多様性へ向けての新しい展開なのである。インターネット上の俳句も、コンピュータ言語の試練を経て多様性へ向かっている。マルティメディアの俳句である。

季語・季節感での多様性を明らかにするために、次の例句を取り上げる。ドイツの自然と風土の中から生まれた日本語の俳句である。

カスターニエの青き実曇天よりもげば（ベルリン）

高橋正子

Vom wolkgigen Himmel

abgeflueckt -- die gruene Nuss

der Kastanie (Berlin) /Masako Takahashi

「カスターニエ」は俳句の季語とはなっていないが、ドイツの風景を作りだしているもの一つであり、実は、食べることの出来るものと出来ないものがある。くり、とち、あるいはマロニエといったところか。この句は、ドイツの風土に相応しい言葉を使って季節あふれる風景を詠むことに成功した。「青き実」は、夏である。海外で俳句を詠むとき、季題、季語、季感といったところを深く再吟味することなしに安易に使用したならば、その句は、ドイツの自然と風土から遠く離れてしまう。季語を「再吟味する」ということは、日本にない、ドイツの新しい季語の発見でもあり、季語の多様性を認めることでもある。ドイツ語の俳句では、季語・十七字という有季定型の約束事がない。このことが、俳句の新しい発展、多様性へ向けての発展を促すことであろう。

多様性の問題は、また、不完全性の問題でもあらうとみている。心理学者岡本栄一氏（川村学園女子大学）に教えられたものであるが、数学基礎論に二十世紀最大の成果といわれるゲーデルの定理があつて、それは、不完全性定理とも呼ばれている。

ゲーデルは不完全性定理でもつて、ある体系がその公理を無矛盾にすると、その体系自体が不完全になるという奇妙なことを明らかにしたのである。すなはち、その体系に関する命題の中で真か偽かを決定できない命題が存在することになってしまふのである。さらに押し進めていけば、その体系では計算不可能であるが、他の体系では計算可能となる命題がその体系の中に存在することになる。

数学基礎論の、この不完全性定理を言語の領域に適用する。自然言語、それに加えて各種のコンピュータ言語は、多種多様に花開いているが、ここにも「不完全性定理」が適用されるとみてよいであろう。どの言語を用いても相当



の情報処理が出来るが、それだけでは不十分であり、不完全であつて、別の言語を使うこととなる。

日本語の俳句が求めてきたものは、それを矛盾のないものにする、日本語俳句の体系自体が不完全になつて、他の言語によつて、英語やドイツ語の俳句によつてそれを解決することとなる。日本語やドイツ語といった自然言語は、それを矛盾のないものにする、その体系自体が不完全になつて、他のそれとは違った言語、コンピュータ言語によつて、それを解決することとなる。この逆も言えるので、コンピュータ言語は、それを矛盾のないものにする、その体系自体が不完全になつて、他の自然言語によつて、それを解決することとなるのである。つまり、特定の言語では表現不可能な部分も他の言語では表現可能となるのである。数学の領域で成立するゲーデルの「不完全性定理」を言語一般の定理として受け入れると、それは、人間文化の多様性の必然を証明することの出来る論理であろうかと思う。

文学の多様性ということとは、また、古き良き文学の保存とともに、時代に耐えられる新しい文学の発見であろうと思う。インターネットの俳句とは、そうした課題に耐えられるのではないか。インターネットと俳句、文学の、この新しい課題を、「現代社会における文学の運命」として捉えたい。これは文学の未来の明るい話であつて、かつての偉大な文学が多くの人々に明るい励ましを与えてきたように、これからの文学もそうあつて欲しい。「文学の秀ぐれたものは、なにより僕らに励ましをあたえる。」と言うノーベル文学賞作家大江健三郎は、「僕は深く気が滅いってくると、医師トルストイ、ドストエフスキー、あるいはマンに救助をもとめる。」と告白している。

トーマス・マンや大江健三郎の「人間らしさ」、そして文体上のフォーマル、これらは「時代を超えた人間性」からくるもので、現代社会と文学を強く結びつけてくれるであろうし、文学は、現代社会のなかでの力を得ることが出来るであろう。それは、現代社会の危機的状況のなかでさえも失われないもので、そこには、人間の未来への救いが確かにある。「人間らしさ」といえば、ゲーテが『ファウスト』の終末近くで述べているところの

自由な民と共に、自由な土地の上に住みたい。(鷗外訳)

という世界にも通じるであろうし、また、ベートーベンの『第九交響曲』にも通じている。その第四楽章での合唱、シラー原作の詩「歓喜に寄せて」は、「お友よ」という親愛のこもった呼び掛けが始まり、その最終連では

同胞よ。星々のかなたに父なる神は必ずおわします。

と神の存在を確信して繰り返して歌う。これは、地上楽園の人間らしい世界に違いない。トーマス・マンは、長編小説『ファウトゥス博士』のなかで『第九交響曲』を、

の 善であり高貴であるもの、善であり高貴だが、人間らしいものといわれるもの

と答えている。

海外での俳句、インターネット上での俳句がますます盛んになってきて、それらのなかにも「生の確認」や「人間的なもの」を求めての行為であると思われるものがある。